
ねころけっと

あひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねころけつと

【Nコード】

N6382Z

【作者名】

あひる

【あらすじ】

「世の中全部くだらねえ病」を患った中学3年の少年。彼の唯一の生きがいは、2匹の捨て猫の世話をすること。人々に忘れ去られた神社でこっそり猫を飼うこと2年。ついに神を名乗る2人の美少女と出会った少年は、ますます現実世界を拒み、神様と猫だけの世界に浸るようになる。

人の世界で幸せになって欲しいと願う2匹の猫の献身と、優しい神様との恋とが、少年を強くしていく物語。はじめは暗め堅めにスタートしますが、徐々に明るくなっていきます。登場人物がほぼ全員

優しい、癒やし系ストーリー。断じて非エロ。

雪白と山姥

1896年、明治三陸大津波によって岩手では甚大な被害が出ていた。

人の世で災いが起これば、神の世界も慌しくなる。

日本の神界で中心的役割を持つ中央神道行政政府の八戸支局長、光世^{りよ}、同じく不来方支局長で光世の母、桜前尼^{おうぜんに}は震災以降度々京都に呼び出され、結果として被災地の神事行政は混乱していた。

そんな折、下北半島の恐山周辺では子連れの山姥が暴れ出し、多くの家畜が襲われ、分かっているだけでも6人の死者が出ていた。

たまらず八戸支局から、勇猛で知られる新田広門を長とした討伐隊が派遣されたが、つい先ほど、その討伐隊が返り討ちにあい、隊長が戦死したという知らせが届いた。

被害は新田氏だけにとどまらず、隊員2名が負傷、御使い3体死亡という散々な有様で、これ以上の任務には耐えられず、すでに撤退を始めたという。

副局長の馬渡金兵衛は直ちに参与らを集め、対応について話し合ったが、あの新田氏が敗れたとあって動揺は大きく、出てくるのは弱音ばかりであった。

「光世様が帰ってくれば山姥などは…」

「津軽に援軍を頼むなど有り得ぬし…」

「なぜこんな時に限って暴れだしたのか…」

「不来方は沿岸部の対応で手一杯と聞く。桜前尼様も不在とあれば援軍は出せまいよ…」

ここは我が、と手を挙げる者も無く、このまま光世局長が帰るまで問題を先送りにするしかない、という意見が大勢となって会は閉

じようとしていた。

しかし、そのようなことになれば無能となじられるのは留守を預かる副局長の馬渡氏である。このまま兵を引くわけには行かず、馬渡氏はやおら立ち上がり、机を叩いて提案した。

「函館には武神と仰がれるホルケウリムセル殿がごいます。氏の助力を得て、討伐隊に合力させるべきであります。函館からなら恐山とも近く、早々に問題は片付きましよう」

この提案には積極的に反対するものも無く、即日馬渡氏は函館に使者を送った。

函館分支局は、早速にも援軍を出すと約束した。

その援軍に先立って、道案内のために派遣されたのがキロルカムイ（アイヌ語で道の神）の名を持つ雪白であった。

雪白はニセコの雪女であったが、慈愛に満ちた性質で、雪山で道に迷った民を度々集落まで帰してやるなど、人と関わるうちにキロルカムイとして信仰されるようになった。

後にホルケウリムセルの妻となり、上級神の登竜門である神学舎に入学。方術制御に長じ、次世代統治支援システム「アマテラス」の構築に携わり、現在はアマテラス管理部門非常任顧問の職にある。寿命も定年も無く、固着化した神界の人事事情にあつて、妖怪からの「神上がり」としては異例の官位持ちまで出世を遂げた才女である。

普通、神は精神体の状態で日々を過ごすが、特別な理由があつて実体化した状態のことを示現しげんする、と言う。

逆に精神体でいることを、解現げげんする、と言い、解現している間は現実の物体からの干渉は受けないし、逆に干渉も出来ない。また、宙に浮いて移動することが出来る。

雪白は単身津軽海峡を飛んで渡り、大間崎に入ると、早速土地の調査を始めた。

道案内、と言っても、道路そのものを調べるわけではない。実際に調査しているのは、地脈、水脈、霊脈の位置と強さ。これらは神や霊体、妖魔などにとって極めて重要な地理的要因となるからだ。

大間から東周りで恐山を迂回して、人々が多く暮らす田名部（現むつ市）の集落に向かう途中、雪白に声をかけて引き止めた少女が居た。

年の頃は10歳前後。粗末な服を着て、顔も手足も随分と汚れている。伸ばしっぱなしでやや硬そうな黒髪がバサバサと絡んで、いかにもどこにでもいそうな、寒村の子供といった風貌である。

しかし、只者でないことは確かだ。

実体化していない雪白を見ることができるということは、霊的素養の高い人間か、人外の者である。それらは秀囲気ですぐに区別がつくものであるが、どうもこの娘はどちらなのかはつきりしない。

年経た妖怪の変化した姿の様でもあるし、ただの人間の子供の様でもある。

「あなた、この辺の子供かしら？」

優しく訪ねると少女は首を小さく横に振り

「たいそう強く賢き高貴な神様とお見受けします。どうか私の願いを聞いて頂けないでしょうか」

と畏まって答えた。

「どうして私が神様だと思うの？ 悪霊かもしれないわ」

「私も昔は神だったのです。だから分かります」

「昔は？」

少し間をおいて少女は答えた。

「今は山姥の子と成り果てました」

雪白は肝を冷やし、辺りを見回した。のんびりとした里山の風景に違和感はなかった。

確かに子連れの出嫁と聞いていたし、からかわれているだけというのも考えにくい。この子の言うことが真実ならば、出嫁は近くに居るはずである。それにしても、一体何が目的で接触してきたのだろうか。

様々な憶測を心の中で整理しながら、核心に触れていく。

「では、あなたの親は今どこにいるの？」

「私の願いを聞いてくれるのなら、母のところまで案内いたします」

「願いと言うのは？」

「母を打ち倒して欲しいのです」

「どうして？」

「これ以上狂い、罪を犯す姿を見たくないからです」

少女は、台本を音読するように淡々と訴えた。

「そう……」

雪白はあまり戦いを好まないし、武で手柄を上げる必要にも迫られてはいない。しかし、ここで断ればこの子はどうするだろう。引き受けても、本隊が来るまで待つていてくれるだろうか。その間にも出嫁は凶行を犯すのではないか。

畏である可能性も充分にあるが、あえて雪白は少女の願いを聞き届けることにした。

神は、アマテラスを通じてそれぞれの階級や所属する神社の格によって神力しんりきが支給される。これを天の力といい、地脈や霊脈から神社を通じて受け取る霊力を地の力。民からの信仰を受けて手に入る霊力を人の力といい、その天地人の力の和が、その神の強さに直接影響してくる。

雪白は従七位の官位を授かっていて、十分な神力を供給されており、アイヌからの信仰も受けている。地元の函館を離れている現在は地の力を受け取れないが、それでも並外れた神力を蓄えていおり、方術のエキスパートでもある。

低級妖怪の山姥などに遅れをとるようなことは考えられなかった。

山姥の子

夏の走り。時刻は17時をとくに過ぎていたが、まだまだ暑さは収まりそうもない。

雪白は足早に進む少女の後を追いつながら、不意打ちに備えていた。数歩で渡れるほどの小さな川に差し当たると、少女はそこで足を洗い始めた。幾らか心に余裕が出た雪白は、ようやく気になっていたことを問う機会を得た。

「まだあなたの名前を聞いていなかったですね」

「私も聞いていませんし、教えられません」

元気の無い声だった。

「私は雪白と申します。この服はアイヌの物ですよ。陰陽師に似てはいるけれど、私は名前を知ることによって相手を支配するような力もついでませんか」

「雪白…さま…」

「昔は神だったというのなら、あなたの母親もやはり神だったのですか？」

「そうです」

魔堕ち、ということだった。妖怪が神になることもあれば、神が妖怪になることもある。真の肉体を持たない神や妖魔にとって、穢れというものは極めて重要な意味を持っている。

命を奪うこと、命を食すこと、悪意を受けることで積み重なっていく穢れは、魂を侵食し、精神を蝕む。一方で、穢れは非常に強い霊力をもたらしてもする。

今度の山姥は相当な穢れを溜め込んでいる可能性がある、と八戸の使者は言っていたが、その山姥と一緒に行動しているはずのこの

子からは、あまり穢れを感じなかった。かと言って穢れが無いような気配も感じらず、限りなく人間の雰囲気に近い印象だと感じられた。

「どうして、あなたは体を持っているの？」

「もうずっと前から、姿が消せなくなりました。母も同じです。穢れが貯まり過ぎるとそうなるのだと思います。」

人間が死後に祀られ一旦神となり、その後に魔に堕ちると、実体を持った妖怪になりやすい。この少女の話にはそれなりに信憑性があった。

だとすれば、母を討つて欲しいという願いも、偽り無い本心なのだろうか。

雪白の心は揺れていた。

例え少女が嘘をついていたとしても、畏だとしても、山姥は滅ぼさなくてはならない。では、その時この子はどうすればよいのか。やはり、滅ぼさなければならぬのだろうか。

「結局、私ももう、妖怪なのだと思います」

少女は石に座り背中を丸め、足元をじっと見つめながら、益々元気の無い声で呟いた。

長い時間悩み抜いてきた様子に見えたが、それも演技であるかもしれない。

この悔いが本心であって欲しい。救いのある結末を願い、雪白は励ましの言葉をかけた。

「でもあなたからは、あまり強い穢れは感じません。これから浄化していけば、必ず神に戻るでしょう」

そう言われても少女の顔は冴えない。

「浄化ができれば、犯してきた罪は問われないのでしょうか？」

その質問はあまりに重く、雪白は答えられなかった。

空気の悪さを察してか、少女はすっと立ち上がって、行きましよう、と少しはにかんで見せた。

川の向こうは広葉樹がまばらに伸びる、明るい林であった。木漏れ日も多く、こんな状況でなければ心地よい緑の雲の中を散歩している心地だったのであろう。

川から離れると、間もなく風向きが変わった。

風に混ざっている瘴気。そして血の臭い。とっさに雪白は風下へ飛びのき身を隠す。

少女はその場に立ち尽くしたまま、何か考え事をしているようだった。

じわり、じわり、臭いは強くなっていく。

数分後、西に向かう獣道から山姥が姿を現した。

ゴワゴワの白髪は天を衝き、その目は闇に染まり、もはやどこを見ているのかも分からない。赤茶けた肌に深く刻まれた皺は、早魑にひび割れた田の泥のようである。

その腕にはだらしなく四肢をぶらつかせた、小さな体が抱えられている。

動物などではない。明らかに人間の子供の死体であった。

山姥はその死体を少女の前にひょいっと放り出して衣服を剥ぎ取ると、ニタリと笑った。

「いい子だったよ。最高の食事だよ。今日はいっぱい頑張ってきたんだあ。これならおまえも食べたくなるよ」

仰向けに倒れた4〜5歳の女の子の生気のない肌に鋭い爪を突き立てて、ニタリニタリと笑う。

「ここが一番栄養があるんだよ。おまえが食べるんだよ。一番良い所だから」

暗赤色の血が滴る、黒い塊を掴み取って、少女の眼前に捧げる山姥。

「贅沢ばかり言っていてはいけないよ。ずっと食欲が無かっただろ

う。心配なんだよ。さあさあ、今日のは本当に良い所だから」

「もういいよ。もういいんだよ。母上。もう私は何も要らないから」
少女は搾り出すようにつぶやいて、臍物を受け取ると、幼い少女の腹の中にそつと戻した。

そして涙をこらえ叫ぶ。

「雪白様。御覧になったでしょう。これが私達です。お願いします。母を止めてください。私にはもう耐えられないッ！」

笹藪の影からスツと音も無く現れた雪白は、先ほどから練っていた方術陣を解き放つ。

タケノコのように地面から飛び出してきた無数の氷柱は碧く光りながら3人の周りをすらりと取り囲み、それぞれが甲高い羽音のような唸りをあげる。4mもの高さを持った柱と柱の間には透明な壁が張り巡らされ、氷の柵牢がたちまちに組みあがった。

事の次第を悟って、山姥は奇声を発し、地面に頭を打ち付けた。

「なして！ なしてだ！ こんなに大切に育ててきた我が子がっ！」
嘆きはすぐに怒りへと変わる。

「裏切った！ 親を捨てた！ 私はまた一人になったんだ！」

血に汚れた手で、覆い被さるように少女に掴みかかる山姥の足をドングリ大の雷が撃ち抜く。

「下がっていなさい。ここから先は私の業しごです」

少女に退去を促し、氷の結界の内壁を滑るようにすばやく移動しながら隙を窺う。

本当は結界の中に少女を入れたくは無かったが、それができる位置関係ではなかったなので、どうしても少女の位置を気にしながらの戦いになってしまう。

小さな攻撃を繋げるより、隙を見て一撃で決めたい、その判断が雪白を守勢に回らせた。

先ほどの雹による攻撃はほとんどダメージを与えられず、傷は瞬く間に癒えていた。

やはり、大きな術が必要と感じて距離を取る雪白だったが、妙な息苦しさに気付いた。

山姥の放つ瘴気が結界の中に充満し始めていたのだ。この瘴気に触れ続ければ、魂が穢れてしまう。やむを得ず雪白は穢れへの抵抗を高める為に示現して戦わねばならなくなった。

実体化すれば、空を浮遊することは出来ず、機動力が大きく殺がれてしまう。また、結界によって土俵が限られている以上、自然と近距離での肉弾戦が主となっていく。

雪白は方術こそ得意だが、体術は苦手としており、山姥の猛攻に劣勢になっていた。もはや大きな術を練る余裕などはなく、氷のつぶてを飛ばしつつ逃げ回るような状態が続いた。

少女は不気味な沈黙を保ったまま、どちらの援護もする気配はなかった。

いかに季節に恵まれないとは言え、山姥の如き妖魔に官位持ちの自分がここまで追い詰められるとは。相手を甘く見ていたことを後悔しつつ、状況の打開を探る。

山姥の一撃一撃は強力であるが、動きの連携は良くないように思えた。夫のホルケウならその隙を付く武勇を持っているが、雪白には無い。やはり方術を上手く使わなければ勝機がつかめないのだと分かってはいるが、この敵はそのための余裕を与えてはくれなかった。

気付けば結界の氷柱は随分と解けてきて、もう長くはなさそうである。早く決着をつけないと取り逃がすかもしれない。見失うことになればまた人が、子供が殺されるのだろう。

意を決した雪白は自分の周りに氷を張り巡らし、自ら氷漬けとなつて防御を固めた。

「亀にでもなつた気かい？そんなものすぐ壊れるよ」

山姥は力いっぱい氷像と化した雪白に殴り掛かる。

一撃、二撃、三撃、四撃目には氷の鎧にひびが広がる。

これが雪白の時間稼ぎであることを、山姥は見抜けなかった。

「ふん。もう終わりだよ。おまえの魂を食べば私はもっと強くなる。そうしたら頼朝ごときの結界、打ち破つてやるのさ」

2歩、3歩退いて、助走をつけて全力で雪白を打ち砕こうとする山姥の背中に激痛が走った。

振り返ると山姥の子は、物憂げに立ち尽くし、その様子を見ていた。

「！？まさかおまえが？」

「いいえ。その子は何もしていません」

そう言つて氷の鎧を脱いだ雪白が右手を突き出し、手のひらを閉じる。

一番最初に張り巡らした氷の結界。その無数の柱が次々と山姥に襲い掛かる。

懸命に2本3本と叩き落しはするが、それが限界であつた。死角を突いて時間差で降り注ぐ槍の雨になすすべも無く撃ち貫かれていく。

もがいてもがいて、また立ち上がったては氷の槍に貫かれ、ついに山姥はどうつと倒れこみ、もはや雪白を睨みつける余力も無いように見えた。

それでも雪白は用心を怠らない。

弱った振りをして油断を誘うのは、妖魔の常套手段である。

少し距離を置いて、新たな結界の方術を練り上げていた時、突如雪白の視界が黄昏色に染まった。

人一人分の小ささながらも、密度の高い強力な結界であった。

ハツとして振り返ると、そこには振り乱した髪もそのままに、氣迫に満ちた視線を送る少女の顔があった。目の前で母が傷つき敗れる様にも動じる気配が無い。

雪白はゾクリとした。

(まさかこの子は…山姥の本体は…)

山姥の子(後書き)

怖い描写はここだけです。以後はありません。

母の愛、子の願い

少女は物も言わずツカツカと大樹の根元に歩み寄ると、膝をたたんで両手を地面に置いた。

そして何かを掴むような仕草をした後、ゆっくりと膝を伸ばす。

その両手には黒い諸刃の直刀が握られていた。まるで元よりそこに突き刺さって居たものを引き抜いたようにも見えたが、自らの力で土と砂鉄から造り出したものだ。

少女はその刀を自らの両足に向けて強く突き刺した。

ドンつと鈍く、くぐもつた音が森に染み込んで、少女は大地に縫い刺された。

苦痛の息すらも漏らさず、次いで木々に絡みつく蔦を引き寄せて、その細い首に巻きつかせる。蔦は首だけではなく、その四肢をも縛り上げていく。

雪白は嫌な予感に震えていた。

古来より、自らを傷つけ、その苦痛を力に転化して術に乗せせる呪術が存在する。この子は私を屠る為に、力を練っている。私が力を出し尽くし疲れるまで、静に待っていたのではないか。人を騙し、罠に陥れるのが妖魔というものなのだから。

そう思えて仕方が無かった。

まずはこの結界を破らなくてはならない。密かに結界の術式を探っていると、ようやく少女が重い口を開いた。

「雪白様……」

搾り出した声には、隠し切れない苦悶を感じ取れた。

「雪白様。最後のお願いが……御座います」

相変わらずその眼には底知れぬ力と強い意志が感じられたが、その声に敵意はないようだった。

「私はこれから真正銘の化け物となります。そうなりましたらどうか、私を滅ぼしてください。どうか、お願いいたします」

その意図を量りかねていると、痛々しくも、少女は笑って見せた。そしてこの森の全てをその胸に収めんがほどに空気を吸い、詠い始めた。

『高天の原に 神留まります 皇が睦 神漏岐・神漏美の命以ちて 八百万の神等を 神集へに集へ給ひ…』

唐突に始まった大祓詞おおはらいことばに雪白はここでようやく少女の真意を得た。この子は私を畏に嵌めるものではなく、かといって母を裏切るものでもなく、ただ母の穢れを我が身に移し、元の姿に戻してやるための時を待っていたのだ。

狂気に吞まれた母はきつと祝詞に強烈な拒絶を示すだろう。だから身動きも出来ぬまでに衰弱する時を、待っていたのだ。その時を得る為に、私を母の元に連れて来たのだ。そして、全ての穢れを背負って一人、死んでいこうとしているのだ。

全ては、母を救いたいが為に

だが現実はその容易くは無い。

穢れを被うということが、どれだけ難しいことであるのかをこの少女は知らないのだ。

なぜゆえに、世に妖魔がはびこるのか。因果というものの重さは実に烈しい。

最高位の神ですらこの山姥の負った穢れの1割も被えるかどうか。まして、なんの訓練も受けていない、無官無格の幼子が、いかに一言一句過たずに大祓詞を奏したところで、髪の毛一本ほどの穢れも浄化出来はしない。

少女の母への想いとその覚悟、そして哀れなまでの無力さが雪白の胸を締め付ける。

せめて最後まで見届けてあげようと、深い敬意を目頭に溜めて、

少女の祝詞に耳を預けた。

肅々と、流れるように、少女は祝詞を詠いきった。

一体どこで覚えてきたのか。その健気さが雪白の心に突き刺さる。どんなに想っていても、どんなに正しく詠えても、何も変えることはできない。

変えることはできない。そのはずだった。

次の瞬間、雪白は我が目を疑った。

少女の目交いに、灰色にくすんだ太陽のごとき方術陣が鈍く輝き、風車のようにくるくると回り始めたのだ。よくよく見れば剣九曜の神紋である。

変わるはずの無い現実が、変わろうとしていた。

「母上。ずっとそばで愛してくれてありがとう御座いました。私は元より生を受けぬ者ゆえ、居るべき場所へ戻りたく思います。いつか、いつか、母上が父上と共に安らげる日々を過ごされますよう。兄上とともに少し遠くより、願っております」

少女がそう語りかけると、山姥の体から立ち込める瘴気がズイと銀色の太陽に引き寄せられていく。

疲れ果て、うずくまったままの山姥から、モロモロと濃い紫の『わだかまり』が引きはがされては少女にこびりついて行く。その様子に雪白は声をひしゃげて叫んだ。

「やめなさい！それはあなたが背負うべき業ではありません。もう、やめなさい」

身にまとった罪悪の外套が軽くなったからか、山姥は少し体を起こして辺りを見回した。

すかさず雪白があらん限りの大声で訴える。

「聞こえますか？私の話が聞こえますか」

声を張り上げ、何度も語りかけるうちに、

山姥はどこかぼんやりとしながらも、雪白を正面に見すえた。まさに憑き物が落ちたというべきか、それはもう、先ほどまでの憎悪に満ちた表情ではなかった。

白く逆立っていた髪の毛も、幾分黒さを取り戻し、乾いた赤土の如き肌も、人の物と判るまでに戻ってきている。

だがそれは、それだけの穢れがすでに少女に受け渡されたということでもあった。

「残念ながら、あなたは罪人です。如何な事情があつたかは存じませんが、あまりに多くの罪を作り、その報いを受けなければなりません。しかし、今、あなたの子がその業を肩代わりしようとしているのです。わかりますか？」

「ええ、覚えております。私は、私は…なんと罪深いことを…」

足元の土をかきむしりながら、山姥はうるたえるばかりであった。「親の罪を子が購うことを、あなたは良しとするのですか？このまわが子が魔に堕ちていくのを黙って見ているのですか？」

「嫌です！私はもう、子を失いたくはありません」

山姥は涙声で力強く答えた。

「ならばお守りください。あの子を救えるのはあなただけなのです」

「一体、どうすれば…」

「あの方術は祝詞に込められた言の葉によつて編まれた物です。あなたの、子を思ふ気持ちを言霊に託して祝詞返しをすれば、あとは心の強さのせめぎ合いとなるでしょう。相手を思ふ気持ちの強いほうが、穢れを引きよせることになります」

「そう…」

「そうですね。私は強くなければならない、それであの子を救えるのならば。私は今一度鬼と身を落しましょう」

そう言つて、山姥はわが子と向きあい、言葉を紡いでいった。

「舞宵^{まひょう}。私は愚かな母でした。そして力なき母でした。あなたの兄もみすみす奪われて殺されて。そして今度はあなたを生きて産み落とすこともできなかつた」

少女はブンブンと頭を振って否定する。

山姥は続けた。

「せっかく皆が私達を悼み、神として祀ってくれていたのに、それを捨ててこんなところで鬼と成り果てて。どれだけあなたにっらい思いをさせてきたのでしょうか。それを分かっているながらも、ただ愛しいあの人元へ参りたいという弱き女の一念にて、押しとどまることができなかつた」

「母上はずうつと優しかつた。弱くなかつた。それに、私だって父上に会いたかつた。だから…何も…」

「そう。私はあの人を想い続けた。そして舞宵。あなたのことも愛し続けた。でも、やはり私は道を誤ってしまったの。愛し方を間違ってしまった。そしてその罪は私が背負うべきものなのです。子に背負わせてしまつては、私は母を名乗る資格を無くしてしまつ」
少女も食い下がる。

「だつて、私のせいだから。私を育てる為に、母上はいつも必死で一生懸命で。その為にやつたことだから。私は見てたから。ずっと、分かつてた。私が居なければ、母上が盗んだり殺したりはしなかつた。それなのに私は何もできなかつた。止めることも。消え去ることも。もう大丈夫だから。私はもう、充分幸せだったから。だから、最後に恩返しをさせて…」

油蟬の騒々しい声は消え、ヒグラシの声が響く。

一匹が鳴けば、十匹が答える。いつの間にか、風は涼しさを帯び

始めていた。

「舞宵。あなたは間違っているわ。いい？」

一息ついて、姿勢を正して続ける。

「あなたはまだ幸せになんてなっていません。親の元で得られる幸福など、たかが知れているものです。大人になって、私の元から離れて、それで一人前の幸せと創ってゆけるのですよ。」

「そして、親に恩を返すというのなら、その行いは親ではなく、いつかあなたが母となった時、その子に返していくべきものです。私も、私の祖先も皆、そうして命をつないできたのです。それを勘違いしてはなりません」

ぴたりと、瘴気の流れが止まった。平静を取り戻した母と、心を乱した娘。もはや勝敗は決していた。

「嫌だっ！私はもう、母上が汚れていくのを見たくない！」

論を捨て、駄々をこねる少女に、母はうれしそうに声を和らげる。

「私はもう汚れたりはいしないわ。今ね、強くなったから。もう自分に負けたりはいしない。だから、さあ」

山姥は手を方術陣に差し伸べ触れようとする。穢れがズズ…と母に戻っていく。

「駄目だ！戻っては嫌だ。私が。持って行くからっ！」

「信じなさい。あなたの母を。そして良く見ておきなさい。愛する人にはね、こうやって手を伸ばして触れたいと願うの。愛とは掴み取るものだから」

方術陣に手をつ込み、さらにその向こうのわが子へと手を伸ばす。

肉が爛れ腐るような臭いが煙る。わずかに漏れる苦痛の溜息をこ

らえつつ、母はまた一步前に進む。

その迫力に、少女はもう言葉が出ない。

「私は諦めたりはしない。必ず立ち上がって、どんな結界も乗り越えて、あの人に会いに行くわ。そして私が舞宵の母ですって胸を張って言うの。そのためにね、舞宵」

伸ばした手が愛娘の髪に届く。

「これからもずっと、あなたの母親でいさせて」

母の髪はまたも白く乱れていた。ひび割れたレンガの如き頬をわずかに膨らませて、山姥は微笑んでいた。

堂々と、笑っていた。

静なる舞い

山姥の心は、負けなかったのだ。切れ上がった鋭い目にも、闇の中に母性の炎はまだ灯っていた。

少女の足を貫いていた剣を引き抜いて、体に巻きついた蔦を丁寧に外すと、歯を食いしばり涙を受け止める幼い頬を優しくさすった。両足の甲の傷が癒えるのを見届けると、ぎゅっと抱きしめて、もう大丈夫、と囁いた。

すうつと赤銅色の結界は消え、ヒグラシは一層に唸りをあげる。もう木漏れ日は差さなくなっていた。

もう一度娘の髪を撫でると、山姥は踵を返し、雪白と向き合う。そしてしわがれた声で言った。

「私は、おまえを倒さねばならなくなつたよ。死ぬ訳には行かなくなつたよ。そう約束したんだあ」

雪白もまた、躊躇無く前に出る。

「あなたにはまだ、私を信じる心は残っていますか？」

唐突な質問に山姥は面食らった様子であったが、静かに答えた。「信じるよ。おまえは恩人だ。それは忘れてないよ。でも駄目だ。私は行かねばならねんだあ」

山姥も一歩前に出る。

「もう少し、待ってみてはいかがですか。その子がもっと強くなるまでの間」

「!？」

「…」

「待ったら、どうなる？」

「その前に、なぜあの子はあんなに穢れに強く、浄化の力を持つのか、教えて頂けませんか？」

「分からないことを聞かれても、分からねえんだよ」

「そうですか…」

「でも、あの子が特別な力を持っているのは確かです。もっと強くなり、地位ある神として活躍するまでに至れば、あなたの穢れも祓えるほどになるやもしれません。あなただって、あるべき姿である方に会いたいでしょ？」

「私はもうたくさん待ったよ」

「ええ。分かります。あなたが誰なのかも。誰に会いたいのかも。分かりました。そしてあなたの強さも。子への想いも」

「よくぞ心を取り戻されましたね。同じ女として、その一途な愛情に敬服いたします。私も、かくありたいと願います」

「私を分かったって、何になるんだあ？」

「申し遅れました」

すつと一息ついて続ける。

「私の名は雪白。寂しき雪の民の眷属にして従七位を預かるアイヌの神。私はあなたの想いを引き継いで、あの子の母になりたく存じます。必ずや立派な神に育てて見せます。ですから…。母君は暫し、お休みになられてはいかがでしょう」

「私に、母親を辞めろっていつのか!」

山姥は声を荒げた。

「あなたは先ほど言いました。親元を離れて、一人前になってこそ幸せになれると。今がその時ではありませんか？」

「待ってください。雪白様は母をどうなさるのですか？」

少女は懇願するような眼で二人を見つめながら駆け寄り、叫んだ。

「封印します。このまま放つては置けば、いつ正気を無くすかも分かりません。それに、私が見逃したところで、間もなくやってくる私の夫に滅ぼされるだけでしょ。あなたが強くなつて、母を救える日が来るまで、眠りにしてもらうしか…生かす道はありません」
それを聞いて、山姥は少しうなだれて言った。

「そうか。そういうことか。それは分かった。分かるよ。でも、私は自分の力で生きたいよ。自分の力で守りたいよ」

「いいえ、母上。私にやらせてください。私を信じてください。そしていつか一人前になった私と共に、父上の元に参加しましょう。それならば、私には明日を生きる希望が湧いて来るのです。お願いします」

娘には分かっていた。もはや封印と滅びの二択しかないと言うことを。即ち、選ぶ道は一つしかないのだと。

山姥はどっかりとその場に胡坐をかいて座り、あっさりと首を縦に振った。

そして笑った。

「そうか、そうか。ならばいいさ」

妙な物分りのよさに、雪白は少し不安になった。

「初めてだったかもしれないねえ。だって何も言わない子だったもの。人のやることに良いとか嫌だとは言うけども、こんな事を言うのは、初めてだったかもしんないねえ」

「信じていただけますか？」

雪白は真剣な目で山姥の真意を探ろうと手足の先まで凝視した。

「雪白様は大した神様だあ。良おく分かったよ。私が潰してしまっ

た花を、おめ様は咲かせて見せたんだあ。間違いはながんべもの」

山姥はすっかり覚悟を決めたようだった。

「一つだけ我がまま聞いてくだんせ。この子に綺麗な着物を、一つでいいから着せてやってくだんせ。私、ずっとそれが、情けなかつたんだあ」

何も言わず、雪白は少女の肩を引き寄せると、藍色の紐を取り出し、ボサボサの黒髪を結び上げた。

そして両肩に手を乗せて、何かを念じた。

すると、少女の着ていた粗末な麻の服はたちまちに見事な着物へと変化していった。

白地に紫のリンドウをあしらった浴衣に、上下の縁に銀のラインの入った淡い紺の帯。

「きれいだねえ……」

山姥は感嘆の唸りを漏らした。

「この子はまだこれからです。これからもっと。美しくなりますよ。そう言われると、どうにもくすぐったくて、少女は細い肩をますますすぼめて、頬を赤くした。

「これは神通力で作ったものですから、すぐに元に戻ってしまいましたが、必ずこれに負けない本物の着物を着させましょう」

「ああ、頼んだよ。楽しみに待っているよ」

「最後に。この子の名はマヨイ、でよろしいですね」

「そっか。さつきは言葉に力を入れねばなんなくて、言ってしまったったんだなあ。踊る舞に夜の宵。それでマヨイだあ。あなた様は舞宵の親になってけるから、教えてやらねばなあ」

「この子の名が舞宵であることは、他に誰か知っていますか？」

「ねえはずだあ。今まで誰にも教えたことはねえし、この子にも人に教えてはならねえと言っている。本当の父親に教える前に、他の物の耳に入れたくはねがったもんなあ」

「そう。良かった。あなたの子のふさわしい、素敵な名ですから。

いつか来た道

雪白は舞宵を田名部に残し、函館に戻ると、出撃の準備を進めていた夫に山姥親子の討伐が済んでしまった事、これから本州の被災地を行脚する為しばらく帰らない旨を伝えると、祝宴も辞して再び一人、田名部に戻った。

舞宵は自分を見捨てず戻ってきてくれた事に安堵したが、なぜ一緒に函館に行かなかったのか、いぶかしく思い、聞いてみた。

雪白は、申し訳なさそうに

「その前に訪ねておきたい人が陸中の国の遠野という場所に居るのです」

と答えた。

「遠野ですか？」

「ええ。ここからは百里も離れているけど、もう少し我慢してね」

「ああ、それと」

雪白は右手の人差し指で宙に何かの印を書き込んだ。

すると、簡素な四角い方術陣が現れ、その中に手を突っ込んでゴソゴソと何かをまさぐり始めた。

神は解現している間、現実の物体を持ち上げる事が出来ない。力を使って動かす事は出来るが、効率的ではない。その為、鞆の役割を果たす術を用いて、物を持ち運ぶのだ。

「中が見えないのが困るのよね。ん。これよね？」

ズルリと方術陣から引つ張り出したのは、白い衣である。これを舞宵に持たせて、またさらに何かをまさぐる。

「絶対に入ってるはずなんだけど。も。小さいと大変なのよね」
急におばさん口調になって、方術陣の中を無造作にかき回す雪白を見て、ああ、見た目ほどキツチリしっかりしている人じゃないの

だな、と舞宵は少し残念に思った。

「あつ、捕まえた！　こんなとこに居たのね〜」

得意気に取り出した若草色の細い帯を、舞宵が抱える白い着物の上に乗せると

「はいっ。じゃあ、着替えましょうか」

と、胸の前で一拍叩いて嬉しそうに言った。

「私に、ですか？」

「とりあえず、です。とりあえず。お母様との約束はもう少し待っててくださいね」

麻とも違つ木の皮が密に編み込まれた、白い布地はずつしりと重く、広げてみれば襟、袖、裾には赤い渦巻きのような刺繍が施された、上等なアイヌの着物だ。

「本当に、私に、ですか？」

もう何十年と、農民漁民の子から剥いだ、粗末な物しか着ていなかった舞宵にとって、この新品と思しき上等な着物はあまりにももつたいなく感じられて、なかなか袖を通す気にはなれなかった。

「はいっ。早くしないと私が脱がしちゃうぞ〜」

また、胸の前ではんと手を合わせる。

冗談のような口ぶりだが、そこからすばやく舞宵の両肩に手を伸ばす動作には、一切の無駄が無かった。

「いえっ、自分で、自分で着られますから！」

雪白の本気を感じ取った舞宵は、着物と帯をぎゅっと抱え込み、虎に追われるウサギの如く茂みの中に駆け込んだ。

暫くして、おずおずと姿を現した舞宵は、まさしくアイヌの子となっていた。

「う〜ん。少し、大きかったですね」

手のひらが袖の中に納まってしまっているのを見て、雪白が眉間に皺を寄せる。

「そ、そうでしょうか」

両腕をパタパタと羽ばたかせ、自分の姿を見回す無邪気な舞宵の一面を目の当たりにして、こんなに小さな体で、母の全てを受け止めようとしていたのだと、改めて哀れに思った。と同時に、あれほど気高く慈悲深い賢人ですら、かくも穢れ、堕ちてしまうのだという事実が震えた。

「いい？私達は旅するアイヌの親子。山姥の子であることは絶対に知られてはなりません。遠野に着くまでは、リムセ、と名乗ってください」

「リムセ、ですか？」

「踊る、という意味です。あくまで仮の名ですよ。舞宵という素晴らしい名を奪うことは、絶対にしたくありませんから」

舞宵は未だ相当の穢れを残している為、精神体に戻ることが出来ず、道中は徒歩での移動となった。

吹越烏帽子の麓で待機していた八戸支局の討伐隊には挨拶だけをし、「光世様には改めて夫が使者を送るから」と伝え、他の神の目を避けながら、早々に南を目指した。

八戸を過ぎた辺りから、津波による被害は大きくなり、行く先々で凄惨な光景を目にした。泥にまみれ、飢餓に苦しむ民の中にあつて、身なりの良い二人は特に目立ち、物乞いがこぞつて雪白に殺到した。

しかし、雪白は民に施せるような物は持つておらず、ただ手を合わせながら民の切実な願いを振り切るしかなかった。

舞宵は、さぞ雪白が心苦しい思いをしているだろうと思い、「子供の自分だけなら物乞いも寄っては来ないから、雪白様は姿を消してください」と何度か進言したが、雪白はこれも修行の内だから、

と言つて聞かなかつた。

人ならぬ者の強みにて、田名部を出てから六日後には宮古に到達していた。

ここからは海から離れ、閉伊川に沿つて西に進み、川井の村よりは南に曲がり、小国川の流れを横目に立丸峠を越えて遠野へ入る予定であつたが、川井まで来ると、舞宵は寄りたい場所があると告げた。

遠野へ抜ける街道の入り口から、西に行き過ぎること一里半。閉伊川が鈴久名川を分けてすぐ上流の松林の中の小道を行くと険しい岩盤質の丘の頂上に、古びた神社が立つていた。

祠、とも言つべき小さな社の社名の書かれている梁にそつと手をかけて、舞宵はどこか申し訳なさそうに言った。

「ここが、私達の祀られていた社です」

決して立派ではないながらも、手入れはされており、二人の居ない間も別当らは信仰をよせ、守つてきたのだらう。

「私も、よく覚えてはいないのですが、どんな所でどう過ごしたのか、母から聞かされていたのです。思ったより分かりやすいところにあつたんですね」

「あなたは、ここに戻りたいの？」

フルフルと頭を振つて、いいえと笑つた。

「ただ、目に焼き付けておきたかっただけです。ではもう、行きましょう」

余韻に浸ることもせず、さつさと急な坂を駆け降りる後姿に、雪白の心境は複雑なものだつた。

予定の道筋に戻り、二里ばかり進んだところで、雪白は今日はこの夜明けを待とうと言ひ出した。日はまだ高く、まだ先へ進めそ

うであつたが、この先は山深く、峠を越えるには早池峰神社のあたりで夜を明かすことになつてしまふ。他の神との接触を避けながらの道中であつた為、手前の江繋という数軒ばかりの集落の外れに野宿をすることにした。

下弦の月が浮かぶ草原で、火も焚かず並んで座る二人。

雪白がこんな山奥の先の神社のことまで知つて驚いた舞宵は、ポツリと口を開いた。

「もしや雪白様は日本中の地理をご存知なのですか？」

「いいえ、そんなことはありませんよ。行ったことがある場所だけです」

「では、この辺りも来たことがあるということですか？」

「ええ。この先の遠野には、かつて共に学んだ友人がいるのです。あなたも名前は聞いたことがあると思いますよ」

「そういつたことには疎いのです」

「巴、という女の人です。巴御前といえば分かるかしら。お母様から聞いたことはありませんか？」

「なっ…！あの巴御前がですか？一体なぜこの地に？」

「それは美しくて賢くて強い人ですもの。破格の待遇で声が掛かつたんですって」

「ということは、その巴様に会うために遠野へ？」

「ごめんなさいね。今まで黙つていて」

暫く黙つた後、舞宵の方を向き、正座してスツと頭を垂れた。

「私は、巴にあなたを預けようと思つて居るのです」

舞宵は何も言わず、表情も変えなかつた。

「あなたの母になりたいと言つておきながら、薄情だと感じるかもしれません。ですが、それなりの考えあつての事」

雪白は、第一に舞宵が山姥の子であることを隠す必要があること。第二に函館では父の封じられている津軽海峡が近すぎる点。第三に

遠野界隈は穢れを祓う浄化の神、瀬織津姫命の信仰が篤く、舞宵自身の浄化に有利なこと。第四に遠野支部長の愛世は物事に無頓着で何かと都合がよい点、そして何より、親友の巴が信用できる人物であることを説明した。

舞宵にはもとより雪白の意向に口を差し挟む気などは無く、ただ淡々と、分かりましたと頷くばかりであった。それが、雪白にはとても寂しかった。

「それでも、私はあなたの母親になることを諦めるつもりはありません。浄化が済んだなら、あなたを正式に養子にして、神学舎に入学させます。約束は必ず果たして見せます。入学式には誰より綺麗な服を用意するわ。そして、あなたが立派な神になれるように支えます。必ず」

「どうして、雪白様は出会ったばかりの私などの為にそのような約束をなさるのですか？私には何も返せるものなどないのに」

「仕方ないわ。だってもう知ってしまったもの。あなたのお母様の想いも。あなたの本当の願いも。そしてあなたに秘められた可能性も。ね」

「私に、可能性？」

「少なくとも、穢れへの抵抗力と、浄化の術式の適正はちょっと常識では考えられないくらい的高素质があるわ。でも…これは隠していたほうが良いと思うの。知られれば絶対にろくなことにならないから」

「私には、そう言われても良く分かりません…。このくらい、普通ではないのですか？」

「普通じゃないわ。とにかく、人前で浄化の力は使わないで。約束できる？」

「はい」

「もう一つ、あなたの可能性」

「え？」

「あなたはこれからたくさんの人に愛されるわ。間違いない」

「まさか…」

「今日は手をつないで寝ましようね。もう明日には遠野に着くわ。そうすればもう、暫く会えなくなるかも知れないから」

草丈の短い広大な寝床に二人は寝転がり、手を繋いだ。

何十年ぶりかで感じる柔らかく暖かい手の感触に、舞宵は母の事を思い出していた。

「少し、思い出しました」

「どんなこと？」

「母は、気が強くて。一度決断すればじっとしていられない、せつかちな人でした。」

「そう？ 慎ましくて穏やかそうに見えたけど」

「母が最初に盗みを働いたのは、私に服を着せる為でした。姿を消せなくなって、服も戻らなくなって。寒くて、恥ずかしくて、私は泣いていたんです。泣いていれば母が、何とかしてくれるだろうと甘えていたのだと思います。あの時、どうして私は泣いてしまったんだろう。手を繋げば、こんなに暖かくって、きつと寒くなんて無かった。きつと我慢できたはずなのに。そうすれば母上だって」

たまらず雪白は力いっぱい舞宵を抱きしめた。

どんなに言葉を尽くしても、舞宵はその悔いをずっと背負っていることになるのだろう。

「すみません。私、また泣いてる。泣いちゃいけないのに。強くならなきゃいけないのに」

「大丈夫。女は泣きながら強くなるものよ。だから、大丈夫」

寝る間も惜しんで歩き続けた、一週間の最後の夜に、二人は互いの心が呼び合う声を聞いた気がした。

遠野の豪腕

翌日は朝から雨が降った。まばらながらも大粒の雨は霧を纏い、女二人、景色も分からぬままにただ目の前に続く細道を進む。

昼には峠を越えたが、雨脚は強まるばかりであった。

昨夜のことが幻であったかのように、二人は一言も交わさず、黙々と先を急いだ。

夕刻の前に二人は目的の松崎八幡神社に辿り着いた。長旅、と言うほどではないが、道行く足の重い一週間が、ひとまず終わった。

境内へ続く門の前にはやや背の高い、赤みがかった髪を一つに結い上げた二十歳くらいの女が立っていた。

武人の気配を漂わせる強面の女は無愛想に楓、と名乗り、雪白らを支部本舎に案内した。

幾つかの社が集まる敷地を通り抜け、藪に埋もれつつある鳥居をくぐると、そこには別世界が広がっていた。

細やかな装飾が施された巨大な石の柱が、何を支えるでもなく8本鎮座し、その向こうには石造りの四角い建物。褐色の重厚な扉の持ち手には、大袈裟過ぎる程大きなパンダの頭部の彫刻がしつらえてある。

その建物の周りには背の高い南国の木が植えられ、建物の屋上にはカラフルな傘が2本立っていた。

「なんですか？ここは」

舞宵が驚いて尋ねた。楓はむっつりとして答える気配が無いので、雪白が説明する。

「ここでも中くらいなの。社格の高い支局にはこの何倍も大きいところだってあるわ」

ここは現実世界とは違う、神々の為の空間。神社によって造りや雰囲気はまるで違うものなのだが、ここ遠野支部の設計テーマは西洋神殿であった。

「なんだか前に来た時より凄いことになってますね。大変だったでしょう」

雪白はどこか同情を寄せるような口ぶりで楓に話しかけた。

「愛世様のご意向でありますので」

楓はいかにも面倒くさそうに、ぶっきらぼうに答えた。

「最近、西洋風の建物は良く見るようになりましてけど、鳥居の中にこれがあると流石にぎよっとしますわね。こういうところは巴も甘いのかしら」

などと話しながら歩いていくと、二階の窓から女が勢いよく手を振って雪白を呼んでいる。

それに気付くと、雪白も手を振り返した。

ふっと姿が消えたかと思うと間もなく、その女は玄関から勢い良く飛び出してきた。

女は楓よりさらに背が高く、豊満な乳をのっさのっさと上下動させて駆け寄ってくる。

「ゆきしろーっ」

満面の笑みで手を振りながらやってくる姿からは威厳も威圧感も感じられないが、なんとなく、この人が巴御前なのだろう、と舞宵は直感した。

前髪はまっすぐに切り整えられ、サラリとしなる絹糸のような黒髪は腰まで伸び、いかにも武家の女といった風貌である。防具も兼ねている金色に輝く髪留めや、朱糸をふんだんに用いた錦にしきの剣道着は実に華やかで、並の男では到底乗りこなせぬじゃじゃ馬の気配を纏っていた。そして何より目を引くのは170cmを越す長身と零

れ落ちそうな胸の膨らみである。

「巴様が見えられましたので、私は役目に戻らせて頂きます」

楓は浅く会釈して外の方へ立ち去ろうとしたが、巴はその襟首を掴んで引き寄せ、唸るような声で詰問した。

「ちよつとつと待ちなさい。アンタ、何の為に予定空けておけつて言われたか理解してないのかなあ。で、一体なんの役目に戻るところなのかしらあつ」

「え。えーつと……。多分、その、門番とか、見回りとか、色々あると思われますっ！」

ついさっきまでキリリと引き締まった態度でクールに振舞っていた楓だが、メツキが剥がれるとこんなものである。

「外でブラブラしてたいってしか聞こえないんだけどお」

「本日は、雨でありまして、このような日は妖魔の類も活発になりたりするのではないかと思ひましてっ」

「巡検なら火波ほなみが行つてるって、知らないはず無いわよねえ」

「あゝ、申し送りが行き違つちゃったかなーであります」

「言い訳はいららないの、いい？ あなたの任務は大切なお客様の犬になること。分かった？」

「いつ！？ 犬でありますか？」

「ちゃあんと躡けてあげたでしょう？ 忘れたって言うなら、もう一度イ・チ・か・ら・可愛がつてあげるけど」

楓を後ろから羽交い絞めにしながら、右耳をつねり上げる巴。

「ちゃ。ちゃんと出来ます。ご命令通りにやるでありますっつっ！」

「語尾はワン、ね。あと、ちゃあんと尻尾も振りなさい」

「心の尻尾は振り切れんばかりでありますっ」

「せっかく口が達者なんだから、無口なフリはやめたら？」

「自分も個性が欲しいお年頃なのであります……ワン」

「あらかわいいワンちゃんね。じゃあ、先に行ってお茶くらい用意しておいて頂戴」

「わんっ」

「返事はハイでしょっ！？ 私を馬鹿にしてるのかしら？」

「うう……」

楓はトボトボと建物の中へと先に歩いていった。

これがあの、女武者の巴御前であろうか。母から聞いていたのはまるで違う様子に、舞宵は絶句するばかりであった。

「もう、生き生きしちゃって。うらやましいわ」

雪白が口も押さえず、ケラケラと笑う。

「ふふっ。居心地は良い所よ。だから自分らしく居られる。雪白も

こっち住みなよ」

「人妻ですから」

「で、こっちはあんたの子？」

「ええ。私はそのつもり」

「つもりって、ははあ、ややこしい感じで、だからうちに来たんでしょ」

「聞いてくれる？」

「もちろん」

そう言ったところで、巴は二人が濡れ鼠になっていることに気付いた。

「で、なんで雨に濡れてるの？」

「ごめんなさい。この子、解現出来なくて。私だけ消えて歩くわけにもいかないでしょう」

「えっ！？ じゃあ、函館から歩いて来たの？ 海あるじゃん。船

乗って？」

「ねえ。この子をお風呂に入れてあげたいの。出来るかしら」

「あ、ごめん、気付かなくて。あと、乾いた服だよ」

なんの変哲も無い友人同士の会話も、ずっと母と二人きりだった舞宵には、奇異に映った。

自分はこの巴という意地悪で怖い人とやっていけるのだろうか、不安は大きくなるばかりであった。

「か・え・で〜っ!!」

巴が大声で叫ぶと、玄関の戸がわずかに開き、中から楓が怯えるように顔を半分だけ出して、じつとりと湿った視線で巴を見た。

「お茶はいいから、お風呂と着替え〜っ!!」

またも大きな声で叫ぶと、小さな声でワン、と返事が聞こえ、楓はパタムと静かに扉を閉ざした。

巴は笑いながらヤレヤレといった感じでお手上げのポーズを取った。

「もう、冗談だったのに。ふふっ。あの子、素直で可愛いでしょ」

「何か、トラウマがあるんじゃないかしら。誰のせい、とは言わないけど」

「強くなるには必要なことよ。ふふっ」

(つまり、私もここに居たらトラウマを…)

大人の会話について行けず、ただ聞いていることしか出来ない舞宵は震えていた。

その震えに気付いた巴は楓を急かす。

「ほらもう、震えちゃってるから〜。早くしてね〜」

「アオ〜ン」

かすかな負け犬の遠吠えが、洋館の壁に張り付き、影を伝って染み込んでいく。

夏だというのに、舞宵の震えは止まらなかった。

建物の中は、外見ほどの能天気さはなく、いたって普通の洋館だった。

一階の左奥の部屋が応接室で、巴は二人を引き連れて中に入った。大きなソファアームがふたつ。巨木を切り出したのであろう、木目の美しいテーブルもある。

舞宵にとっては、どれもこれも初めて見る物ばかりで、こんな世界もあるのだな、と息を呑んだ。

「まあ、座って座って」

と、巴に勧められはしたが、二人とも濡れたままである。雪白は解現すれば良いだけであるが、舞宵が濡れているのに自分だけ、というわけにもいかない。

「でも、濡れてるから」

「じゃあ、脱ぐ？」

巴の、両手でナニ力を揉みしだくようないかわしい動きに、場が凍りつく。

「ちょっと愛世ちかしよさんに毒されてるんじゃないの？さつきからちよつとおかしいわよ？」

「馴れって怖いよね」

「友人としては、もうちよつと気を確かに持つてもらいたいわ」

「複雑なのよ。こつちも」

「大変なのは聞いているけど、あの人のペースに巻き込まれたら駄目よ」

「うん」

舞宵は一週間前、雪白に脱がされそうになった事を思い出して、類は友を呼ぶんだな、と密かに納得していた。

愛世というのは、ここ遠野支部の部長のことである。

八戸局長の光世かがりよの双子の妹であるが、強大な力を持つ光世に対して愛世は何の力もとりえも無いうつけ物で、「世に救い難き朔太郎」などと、どこへ行っても嘲笑われる存在であった。

朔とは新月の事である。光り輝く満月のような姉に対する比較で、何一つ輝かない凡骨という嫌みであり、女なのに太郎、と呼ばれるのは、立ち振る舞いに女らしさがまるで無い事への痛烈な皮肉である。

しかも、本人は会話すら成り立たないほどのうつけであるのに、親の七光りで正八位の官位を持ち、いんちきで国家二級の資格を取り、郷社クラスの神社で部長職にあるのだから、妬まれ、悪口を言われるのも無理からぬことであつた。

そんな無能で無責任な部長の全権代理として拔擢されたのが巴であつた。

金の産出で知られるこの地域は、活発な地脈が何重にも走り、水脈にも恵まれているパワースポットであるが、西以外の全方面を山に遮られている。その山々には霊山である早池峰山・五葉山が含まれており、地上に噴出した地の力の流れは極めて滞り易く、古来から魑魅魍魎がはびこつた。妖怪の巢窟となつたこの地方は、人も神も統治に苦しみ続け、長く不安定な情勢であつたが、巴が赴任してからは彼女の粉骨碎身の努力によって、良く安定していた。

「同情するわ。大変だものね、ここは」

「あの馬鹿のお守りが無ければ、もつと楽なんだけどさ」

「でも、好きなんですよ」

「まあ、本当に嫌いならもう辞めてるしね」

「私も京都で何度か会ってるんだけど、会う度に初めましてって言われるの。で、そのあとは何言ってるのか分からないんだけど、ハイソウデスネって誤魔化してるわ。毎日一緒に居たら、もうやめて！って殴っちゃうかも」

「あたしは初日にガツツリ殴ったけどね」

「でも、あの人相手だと、喧嘩にもならないですよ」

「まあね」。親にもぶたれた事ないのに、泣かれて、萎えたわ

よ

「そういう繊細なタイプって、和歌とか得意なんじゃない？」

「あゝ、和歌って言えばこないだ凄いのを詠んで、教育係の籐七郎さんが思わずぎっくり腰になったんだって。なんだったかな。なんか芋虫が野菜に乗って宇宙まで飛んでくっついていう感じなので、しかも本人は恋歌だっけって言い張ってるの」

「なんだか凄く楽しそう。聞いてみたかったわ」

「ふふっ。聞いたあとに殴りたくなるわよ」

「巴にしか殴られた事ないのに」とかいつて泣いちゃうかしら」

「でもあの馬鹿を殴っていいのは私だけだからね」

「はいはい。ごちそうさま」

女という生き物は、のろけ話と悪口を言っている間は、しゃべり疲れる事などないらしい。

会話に入り込めない舞宵は、孤独を噛み締めていた。

「巴様。お風呂が沸いたワン」

扉の向こうから哀れな子犬の音が響く。

「楓。まず部屋に入りなさい」

「はっ、失礼しますワン」

おずおずと扉をあけて、楓はまた顔だけを出して巴に何か言いたげな、じつとりとした視線を送った。

「またこの子はすぐいじけて。自慢の火がしけるわよ。シャキッとシなつて」

「わふ…」

「もう本当にナメクジみたいにジメジメして。じゃあもう語尾はワシじゃなくてナメにするわよ？」

「わかりましたナメ…」

従順すぎる楓に巴が呆れる。

「……。もうちょっと鍛えないと駄目みたいね。まあとりあえず、

あれ？ この子名前なんだっけ？」

「り、リムセです。」

「あら、可愛い声ね。じゃあ、リムセちゃんは楓についていって、お風呂に入ってきてくれるかな？」

「はい。お邪魔します」

舞宵と楓が退室すると、雪白は一週間ぶりに解現し、ソファに腰掛けた。

「で、何者なの？あの子。普通じゃない感じだけど」

「これは私達だけの秘密よ。約束できる？」

「てことは相当ね。覚悟して聞かせてもらっわ」

「あの子は……」

そう言いかけた時、雪白は部屋の外に誰かの気配を感じた。

昼行灯を湯に浸けて

「おい、巴。風呂入ろうぜ」

何の前触れもなく開け放たれる扉。その向こうには銀に輝く西洋甲冑を着た女性が立っていた。

クルリクルリと毛先が跳ねた短髪の頭をくしゃくしゃと掻き耑り部屋を見回すと、小鼻をヒクヒクと動かし始めた。

これが噂の愛世である。二重まぶたの大きな目をクリクリとさせて、少し考えたあと、今度は鼻をつまみ、おかしな声で挨拶をした。

「ああ、誰か来てたんだね。でもまだおやつの時間じゃないよ？」

「初めまして。巴さんの友人で雪白と申します」

「どうも初めまして。巴の代理の愛世です」

「愛世様、今は大切な話をしておりますので、外で火波ほなみとでも遊んでいてください」

巴は愛世の銀色の甲冑を押して外に出そうとする。

「でも僕も晩御飯が何か知りたいよ。ずるいよ。二人だけで決めるなんて」

「どうせまた里でフラフラ遊んでいたのでしょうが、私達には食事はありません。人間とは違うのだと何度言ったらお分かりになるのでしょうか」

「神は人、人は神だよ」

「!？」

急に真面目な顔で哲学めいた事を言いだすものだから、巴は意表を衝かれて黙ってしまふ。

「でも巴って人間か神か、どっちかって言ったら、小姑っぽいよね」
次の瞬間、ブンっという風切り音と共に愛世は廊下に吹っ飛んだ。

「まったく、毎日こんな調子なんだから！時々本当に殴ってやるうかと思うわ」

巴の右フック、右フック、左ストレート、右アッパーの連続技がヒュンヒュンと空を切る。

「今のは、ノーカウントなのね。」

ひきつり気味に雪白が笑うと、巴は腕組みしてバツの悪そうな顔をした。

「さっきのは紙一重の極意って言って、相手にはギリギリで触れていないからノーカンなの」

「どうして楓さんがあんな風なのか、分かった気がするわ…」

「で、さっきの話を続きだけど。あの子がどこの誰なのか」

「ごめんなさい。それはちょっと待って頂戴。名前はね、舞宵っていうのよ。とりあえず、早池峰の北側の辺りで祀られていたみたいなの」

「あ、じゃあうちの近くなんじゃない。でもなんで函館に？」

「正確には恐山の近くで、母親と魔堕ちしてたのよ」

「それで、母親は？」

「あの子の首にぶら下がってる小石よ。四重に封印してようやく瘡気が漏れて来なくなったの。かなりの穢れだったわ」

「雪白がやったってこと？」

「ええ」

「それでよく子供が懐いたわね」

「あの子なりに、色々考えているんだと思う。私にはまだ分からない事だらけよ。痛々しいくらい相手に気を使う子よ」

「そっか。じゃあ、わざわざ遠野まで来たのは？」

「うーん。ごめんなさい。単刀直入に言うと、匿ってあげて欲しいのよ」

「本っ当に単刀直入ね。断りにくいわ」

「駄目なら函館に連れて帰るけど、こっちにも色々あるのよ」

「まず、その色々ってのがどのくらい色々なのか聞かせて。即答できると話じゃないから」

「うん。ごめんなさいね」

それから雪白は、舞宵の母が山姥となって、多くの人を殺してしまった事、八戸支局では死んだ新田広門をはじめ、多くの被害を出し、舞宵の存在を知れば必ず罰するだろうと言う事。そして舞宵が母を想い、自らを犠牲にして救おうとした事、そんな舞宵を母は嗜めて、自ら封印を受け入れた事などを話した。

始めは飄々としていた巴も、話を聞くうちに沈痛な面持ちに変わっていった。

二人が話し込んでいる間、愛世は風呂に来ていた。

「楓も入ったらいいじゃないか。僕一人じゃ何秒息が止められたか、タイムが計れないし」

「残念ですが、私は火の加減をしなければなりませんので。尚、現在浴場には客人のリムセ殿がおりますので入浴はご遠慮ください」

「じゃあ、三人で入ろうか」

愛世は楓の右手の小指を握り、グイグイと引っ張っていった。

「折れますう。折れますうて」

浴室に騒々しい二人が入ってきたので、舞宵は慌てて身を潜め顎まで湯に浸かった。

なんの遠慮も恥じらいも無く、愛世は全てを曝け出したままザブザブと湯の中を歩き、舞宵の隣に座った。

「ああ、さつきすれ違った君か。リムセちゃんだね。僕は愛世だよ。よろしくね」

「はあ……。よろしくお願いします」

昨日雪白が言っていた通りの無頓着な人だと、無防備な裸を見て思った。

「ほらほら。楓も早くおいでよ。もう何年もお風呂入ってないよね」

「い、嫌な言い方しないでください！　っていつか、私達はお風呂とか必要ないじゃないですか！」

「じゃあ、なんでここにお風呂があるんだろうね」。楓は知ってる？」

「さあ」

「ほらほら。楓はいつもそうやって面倒くさがって答えないんだよ。意地悪だよね」。正解は、解現できない妖怪の部下が多いから、食堂と浴室を作った。でした」

「知ってるなら聞くなよ」

思わず楓は小さな声で呟いた。

「そうそう、語尾にナメってつけなくて良いのかナメ」。巴に言いつけるナメよ」

「きつ、聞こえてたんでありますか？」

「取りあえず、示現して風呂な。話はそれからだから」

急にガラの悪い態度で脅しに掛かる愛世に、楓も仕方なく長タオルを嚴重に体に巻きつけ湯船に浸かった。

「楓のせいで、リムセちゃん何にも話せてないよ。全く。で、リムセちゃんて雪白さんの子供？」

「い、いえつ。まだなんとも」

雪白に子供が出来れば巴が騒がない筈はないが、そういう話は聞いた事が無く、実子でないことは愛世の予測の範囲内であった。そして、今の舞宵の答えで雪白が養子について考えているのだと気付いた。つまりそれが遠野を訪れた目的である事も。

「どおりで。雪白さんはあんなに肌が白いのに、君は結構浅黒いものね。顔も似てないし。」

「愛世様。そういう言い方は」

楓が愛世の無礼を嗜める。

「僕は好きだよ。夏の野うさぎみたいじゃないか。遠野といえばウサギ狩りだしね」

そういつて愛世は舞宵の少年のような胸の辺りをジロジロと眺め

た。

いくら女同士とはいえ、恥ずかしいものは恥ずかしい。舞宵はたまらず背を向ける。

愛世の『嗜好』を知っている楓は、一層低い声で警告を発した。

「ウサギを狩る前に、巴様に狩られると思われませんが」

「僕だつてたまには狩られる側じゃなくて、追いかける側に回りたいんだよ。リムセちゃんにウサギの耳をつけて追いかけてこしたら楽しそうだと思わないかい？」

「そ、それは…」

楓は頬を緩ませて、否定しなかった。

「冗談だよ。僕が気になったのはその首飾り…って言うのかな？その石の方。もつと綺麗な石なら、その辺にいくらでもあるのになっと思ってさ」

「これは、母との約束の証です。私にはとても大切な石なのです」

愛世は、なるほど、という表情を微かに浮かべつつ、質問を次に進めた。

「そう。ならば大切にしないとね。で、ここには何しに来たのかな。遊びに来たの？」

それについては、雪白が巴に頼んでみる、と言っていたし、自分は勝手に口を挟まない方が良いのだろう、と思っていた舞宵だが、逆に自分が何もせず全てを人任せにするのも無責任だと感じていた。

「あの、愛世様！」

舞宵は勢い良く愛世の方へ向きなおすと、唐突に切り出した。

「突然で申し訳ありません。どうか聞いて頂きたいお願いが御座います」

昨夜、雪白は愛世を無頓着な人、とは言ったが、無能でお馬鹿だと言う事を舞宵に伝えていなかった。その為、舞宵は愛世に対して、さっき見た巴よりまとも、という印象を持った。

「なんだか訳ありみたいだし、そのために遠野まで来たんだよね。ちゃんと聞くよ」

さっきの巴との馬鹿げたやり取りとは違って変わって、理知的な受け答えである。

舞宵は愛世に直談判した方が賢明だろうと、思いをまっすぐにぶつけた。

「私をここで働かせて欲しいのです」

「うん、でも何で雪白さんのところじゃ駄目なのかな？」

真面目に対応する様子を見て、楓は愛世が舞宵を気に入っているのだな、と感じた。

「自慢じゃないが、愛世様が真面目に人の話を聞くのは珍しい。せっかくだから、遠慮なく相談したほうがいい。愛世様は乗り気だ」
ばあつと舞宵の表情が明るくなった。

「おい、巴。なんで風呂に来なかつたんだよ」

またしても無遠慮に応接室の扉を開け放ったのは愛世であった。

反射的に巴が縮地の術で間合いを詰め、掌底突きを放つが、その右手は楓の両手で受け止められてしまう。

「後ろにお客様が」

愛世の後ろには風呂上がりの舞宵がいた。

「毎日サボってばかりにしては、いい反応じゃない」

「人目を避けて努力しているのであります。ナメ」

「明日からは私の目の前で努力してね」

巴は怒るかと思いきや上機嫌で楓の頭を撫で回した。

「はっ、はあ」

楓は顔を真っ赤にしてシュンと下を向いた。

「じゃあ、せっかくだからこの辺を案内してあげてもらえるかな。こっちは色々積もる話があるんだよね」

「りよっ、了解ナメ」

「もうそれはいいって」

巴は苦笑して、チラリと雪白に視線を流した。

「あゝ、いやいやいやいや、ちよつとその前にさゝ」

愛世が会話に割り込む。

「僕も…」

「駄目です」

言い終わるのを待たず、きつぱりと巴が断る。だが、愛世は怯まなかった。

「楓はもう遊んでいいよ。僕達は作戦会議をするから」

そういつて舞宵の手を引いて室内にグイグイ入っていく。

「今、難しい話をするところです。愛世様は外にいてください」

巴は再度退出を勧告するが、愛世は全く気にも留めなかった。

「さあ、座つて」

舞宵の手を引いて、ソファに座らせると、その隣に自分も腰掛けて言った。

「巴。たまには僕も難しい話をしてみようと思うんだ」

巴はハツとした表情を浮かべた。

「じゃあ、楓。案内の役目はとりあえずいいから、二階の客間を準備して」

楓が去ると、巴は閉じた扉に鍵を掛けて三人の方に振り向いた。

「本気ですか？ 愛世様」

神妙な表情の巴とは対照的に、愛世は顎を手の甲に乗せて涼しい顔で妖しく笑みを浮かべた。

「巴だつて、ずっとそうしたかつたんじゃない？ 親友に隠し事をするのは、辛かつたでしょ？」

ああ、この人は本気だ。巴は落ち着かないみぞおちに手を当てて、ふうつと深呼吸した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6382z/>

ねころけっと

2012年1月2日10時49分発行